

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01169

研究課題名（和文）参加型映像制作による民話の活用と伝承に関する映像人類学的研究

研究課題名（英文）A visual anthropological study on the utilization and inheritance of folktales through participatory video

研究代表者

分藤 大翼（Bundo, Daisuke）

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号：70397579

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：中部アフリカ、カメルーン共和国の熱帯雨林に居住する狩猟採集民Baka（バカ）の民話に関する映像人類学的研究をおこなった。Bakaの文化には文字がないため、民話はすべて口承で伝えられている。消失の一途をたどっている民話を、文字ではなく映像によって記録し、Bakaの人々と共に視聴し解釈することによって、民話の現代的な意味や意義を明らかにし、あわせて継承する方法を探った。民話の映像化を、人々の「参加」によって実現し、彼らの世界観や価値観の解明を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Bakaの民話集は既に5冊ほど出版されている（フランス語とBaka語の音声表記）が、Bakaの民話に関する研究は少なく、映像を活用したものは本研究が初めてである。民話の語りはパフォーマンスであり、語り手の口調や身振り、周りの聞き手による合いの手や歌などの反応も合わせた集合的な行為である。したがって、民話を研究するうえで映像によって記録する方法は有効であり、それを資料として様々な研究が可能になる。また、民話を映像化し、上映することによって、Bakaの人々にとってだけでなく、様々な人たちにとって、各自の世界観や価値観を再検討、再認識する機会を提供することができる。

研究成果の概要（英文）：I conducted a visual anthropological study on the folktales of the Baka, a hunter-gatherer living in the tropical rainforest of the Republic of Cameroon. The Baka's society is non-literate society and they inherit their folktales orally without writing language. But their folktales are disappearing in recent years, so I documented the folktale tellings with video. I watched and examined the video with the Baka people and we sought to clarify the meaning and significance of the folktales and to find a way to pass them on. We attempted to elucidate Baka's worldview and sense of values through participatory video or collaborative filmmaking.

研究分野：文化人類学

キーワード：民話 参加型映像制作 伝承

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進行にともない、世界各地において伝統文化の継承が難しくなっている。特に文字を持たない社会において語り継がれてきた民話は、記録されることなく、語られる場や語り部の減少によって急速に失われつつある。民話には、その民話を継承している人々の世界観や価値観が反映されていることから、外部の者にとっては当該文化を研究するうえで貴重な資料になるとともに、当該民族の人々にとっても自らの文化を再認識し、変容の過程にある現状を測るうえで重要な資料となりうる。本研究の対象となる Baka (バカ) という人々の民話も同様の状況にあることから、本研究の取り組みは、他の無文字社会においても通用する取り組みとなることが期待できる。

Baka の民話の聞き書きは、既に 5 冊の書籍 ( フランス語と Baka 語の音声表記 ) として出版されており、研究者をはじめ識字者にとっては貴重な資料となっている。しかし、Baka の人々のほとんどは非識字者である。したがって、出版されている民話は Baka の人々にとって価値を見出しにくいものとなっている。

報告者は、1996 年より Baka の人々のもとで調査研究を継続しており、2002 年からは映像による記録もおこなっている。民話の継承ということでは、民話を映像によって記録することが、文字によって記録することよりも有効な面がある。民話は本来、語り手によるパフォーマンスであり、口調や身振り手振り、また周囲の反応 ( 合の手や歌など ) を含むものである。その全体を記録することは、文字よりも映像による方が有効である。また、民話の現代的な解釈、Baka の人々にとっての意味や意義を明らかにするうえでは、映像化した民話を共に視聴し、議論すること。そして、その反応や発言を記録し分析することが有効である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、中部アフリカの熱帯雨林に居住する狩猟採集民 Baka を対象に、無文字社会における民話の現代的な解釈や意義を明らかにし、映像を活用した民話の受容と活用のモデルを構築することである。

本研究の対象である Baka は、伐採による居住地域の破壊や自然保護のために狩猟活動が制限されるといった状況に直面している。このような状況に対して、先住民としての権利を守るための組織が設立されており、報告者は組織の代表者たちと平成 23 年より共同して参加型の映像制作をおこなってきた。これまでに制作した映像は、Baka 社会の問題点を明らかにして改善の必要性を説くようなものや、先住民組織の活動を紹介するものであった。

Baka の集落で開催した上映会を通じて明らかになったことは、これらの映像作品は、問題意識を共有することには役立つものの、積極的な議論を引き出すうえでは十分に機能していないということだった。やはり、同じ現状を描くとしても、描き方に工夫が必要であり、身近な物語の形式をとる方が効果的だと判断した。そこで、本研究は、Baka 社会で受け継がれてきた民話を素材に映像を制作し、Baka の人々と視聴することによって、Baka の人々の伝統的な世界観や価値観を見つめ直すきっかけを作るとともに、民話の現代的な活用法を見出すことを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1)報告者がこれまでの調査において収集した Baka の民話、ならびに既に出版されている Baka の民話集を検討する。民話には、人と動物との関わり、人と神々との関わりや、男女の関係等が描かれている。これらの要素を整理・再構成することによって映画のプランを作成する。

(2)カメルーン共和国において民話の調査ならびに参加型映像制作を実施する。Baka の集落において、これまでに撮影してきた民話の語りを上映し、民話について説明してもらうことによって、Baka の人々による今日的な民話の解釈を明らかにする。また、視聴中の反応や言動を映像によって記録し分析することによって、民話の語りが喚起する情動（喜び、悲しみ等）を解明する。また、Baka の人々に民話の場面を演じてもらったり、新規に民話を語ってもらったりすることによって、さらに上映・調査に活かすうる映像を撮影する。

(3)Baka の人々、先住民組織のスタッフおよびカメルーンの研究者や映像作家と協同し、映像作品を制作する。また、試作した作品を参加者と検討し、再撮影、再編集をおこなう。シナリオ案の検討に始まって、試作品について議論する過程を通じて、民話の現代的な解釈ならびに活用法を明らかにする。一般に映像人類学的な映像作品は研究者が独自に制作するが、本研究は対象となる人々とともに制作する「参加型映像制作」を実施する。参加する人々は、映像の制作を通じて、対象文化を客観的に見直す機会を得る。そして、その文化が抱える課題を認識し、積極的に関わることができるようになる。参加型映像制作は、近年さまざまなコミュニティー活動を開発・支援する目的で実施されている (Milne, Mitchell and De Lange 2012)。

### 4. 研究成果

(1)出版されている 5 冊の Baka の民話集（フランス語と Baka 語の音声表記）に収録されている民話の数は 120 ほどである。他方、報告者がこれまでに採録した民話は、30 ほどになる。従来採取されてきた民話は、「動物や神が登場するもの」が多かった。それに対して報告者は、地水火風、雨や雷、太陽と月といった Baka の人々が暮らす自然をモチーフとする民話を採取した。これらの民話は、彼らの暮らす自然環境を映像化するうえで有用である。例として、風についての民話では、「風とは、とても薄い人物が走り去ることで吹くもの」と語られた。また、星についての民話では、「かつて星は太陽と同様に熱く照っていて、あまりの暑さに耐えかねて、神が遠くに追いやったのだ」と語られた。Baka の人々は学校教育を受ける機会が乏しく、科学的な認識は浸透していない。したがって、民話には自然現象に対する Baka の人々の認識を探る手掛かりが秘められている。

別の側面として、これまで十分に取組みされていないテーマとして恋愛関係に関する民話を挙げるができる。Christa Kilian-Hatz が 2008 年に出版している民話集には、「女性に関する様々な側面：恋愛関係と一夫多妻制」という章があり、5 つの民話が収録されている。これらの民話に加えて、Aka という同じピグミー系の狩猟採集民の性愛に関する調査の報告もあることから (Hewlett 2008) Baka の人々の恋愛関係と「嫉妬」をはじめとする感情について研究するために、新規に 5 つの民話を収録した。

(2) 2002年より継続的に撮影してきた映像を整理し、本研究に生かせるようにした。既に撮影済みの映像を把握することで、新たに必要な映像を撮影することが容易になる。また、映画の演出法についても、アフリカ映画をはじめ多くの映画を視聴し、関連する文献を読むことで学ぶことができた。また、現地調査において必要となる機器を購入し、民話の映像化に適したカメラやレンズを入手し、現地において可能な撮影方法について検討した。

(3) 民話の語りの撮影：令和元年度にカメルーン共和国の集落において調査を実施し、民話の収集と翻訳、民話の場面にふさわしい映像の撮影をおこなった。既刊の民話集の検討を通じて、まだ収録されていないテーマを明らかにし、新規に収録をおこなった。また、既刊の民話集の朗読の収録を試みたところ、読み書きに通じている者であっても、自然な語りにはならないことが判明した。そのため、民話集に収録されているテーマであっても重要なものは改めて撮影をおこなった。

(4) 民話の翻訳作業：調査集落において実施した翻訳作業の過程で、Bakaの人々が強い関心を示す民話や場面（恋愛関係のもつれ等）があることが分かった。また、そもそも民話は人々が森でキャンプ生活する際に、夜間の娯楽として語られてきたものであり、森でキャンプ生活をする機会が減っている現在、若者たちは民話を聞く機会を失っていることも分かった。これらの状況を踏まえると、民話を保存・活用するために、映像による記録を早急に進める必要があることが分かった。さらに、先住民組織の代表者に翻訳を協力してもらったところ、録音の内容に強い関心を示し、広くBakaの人々に聞かせる意義を認めた。

(5) 民話の映像化：採録された民話に応じて、映像化するうえで必要な光景や場面の撮影をおこなった。これらの素材を整理し、あわせて報告者が2002年より撮影している映像の編集作業を進めた。加えて調査期間に、カメルーン共和国の映画作家とも連絡を取り、今後の作業への協力を依頼することができた。

研究実施計画においては、令和元年度に実施した調査に基づき、令和2年度に再び調査を実施する予定であった。しかし、令和2年度、令和3年度と新型コロナウイルス感染症の影響により調査を実施することができなかった。そのため、対象社会において民話の映像を活用する効果については確かめることができなかった。この点は、後継の研究において十全に取り組む。

#### 【明らかになった課題として】

(1) 民話・神話研究において大きな成果をあげてきた構造分析も解釈学的な研究も、いずれも聞き書きされたテキストを対象としている。そのため、無文字社会において「語られる」民話が、当該社会の人々にどのような情動を喚起し、人々にどのように解釈されるのかという側面については明らかにされていない。文字を持たない社会の人々が、民話の語りを記録した映像を視聴することによって、何を感じ考えるのかということが研究されなければならない。

カメルーン共和国における調査では、地域の異なるBakaの集落において上映・調査を実施し、先住民組織や研究機関においても上映会を開催し、本研究について議論する場を設ける。これらの過程を通じて、カメルーン社会におけるBakaの民話の受容と活用の可能性を明らかにする。

(2) 狩猟採集社会を平等主義と特徴づける先行研究において、平等主義が実現している要因の一

つとして「妬み」の感情があることが指摘されてきた。そして、具体例として、食物分配における平等性や、人間関係における対等性などによって説明されてきた。しかし、当事者である人々が、どのような状況で「妬み」を感じるのか、またその背景となる価値観については、十分な研究がおこなわれていない。本研究では、人間関係や恋愛にまつわる民話の検討を通じて、Bakaの人々の間で「妬み」をはじめとした感情が喚起される場面を抽出し、狩猟採集社会の平等性を支える言動を明らかにする。特に、夫婦関係や恋愛関係にまつわる民話をとりあげて、その場面を演じてもらうことも想定している。ある場面や立場を理解するうえで、演劇的な手法は有効である。本研究は、劇映画の手法も取り入れながら調査をする可能性を探り当てている。

調査対象となる人々の感情や情動に着目する研究は人類学をはじめとして進められており、国内の成果としては2020年に『アフェクトゥス - 生の外側に触れる』が出版されている。本研究は、民話の語りや映像に触発される人々の言動を対象としている点で、情動(アフェクトゥス)を対象とするこれらの研究と繋がりがあると言える。以上の成果を踏まえて、報告者は「狩猟採集社会における「嫉妬」の語り カメルーン共和国 Baka の民話」という題目で論文の執筆に取り組んでいる。

(3)本研究において重要なことは、民話の上映会を実施し、視聴する人々に議論の場を開くことによって、当該文化への新たな認識を生み出すことである。必ずしも映画の完成を目的とはせず、上映-制作-上映のサイクルのなかで、民話の受容と活用の可能性を探求する試みを継続する。そうすることで、従来の研究手法では記録されることも議論されることもなくなっている民話を、対象民族文化の理解に役立てること、さらには対象民族の人々にとって自らの文化をより良く理解する資源を提供する。以上を踏まえて、次の3点について学会や学術誌上で発表することを予定している。1. 無文字社会における民話の実態と受容と利用の可能性と課題について。2. 民話にもとづく参加型映像制作や劇映画の手法について。3. 民話にあらわれる狩猟採集社会の平等性や対等性を支える情動(妬み)について。

#### 文献

Bonnie L. Hewlett and Barry S. Hewlett, A Biocultural Approach to Sex, Love, and Intimacy in Central African Foragers and Farmers, William R. Jankowiak ed. *Intimacies: Love and Sex Across Cultures*, Columbia University Press. 2008

E-J Milne, Claudia Mitchell and Naydene De Lange eds. *Handbook of Participatory Video*, Altamira Press. 2012

西井涼子, 箭内匡編. 『アフェクトゥス - 生の外側に触れる』, 京都大学学術出版会. 2020

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------